



写真右から、校長・藤田正樹先生、連携推進グループリーダー兼1学年主任・野秋貴浩先生。ポスターに描かれた地図の緑色部分が、同校のある山北町の位置。

Case

1

山北高校  
(神奈川県立)

リアルな想像力を刺激する探究プログラムで  
「未病」「防災」を切り口に自治体や企業と連携、  
地域に課題と解決策を提案できる力を育む

「与えられた課題をこなす」から  
「自分で考えて行動する」へ

神奈川県西端の地域に位置する県立山北高校。文系・理系の他に、スポーツリーダーコース(2016年度まで募集)を前身とするスポーツ系のカリキュラムをもち、「スポーツの山北」として地域から親しまれている学校だ。同校生徒について、藤田正樹校長は「とても素直で、言われたことは120%を目指して努力する」と高く評価する一方で、課題感も指摘する。

「中学校までのリーダー経験などの不足もあると思うのですが、自分で考えて行動する点に物足りなさを感じます。しかし、彼らにはスポンジのような吸収力がある。経験の機会と時間を与えれば、大きく伸びると考えています」

そんな生徒たちを地域と共に育てていこうと、今年度より、総合的な探究の時間と学校設定科目を中心とした探究プログラムを立ち上げ、1学年から学年進行で取り組んでいる。

同校がある地域は、少子高齢化や産

業の縮小などが進むなかでどう活性化させていくかという大きな課題をもつ。これまでも地域イベントの手伝いや近隣の小・中学校との交流などに呼ばれることで地域と関わってきたが、その関係性を発展させ、今度は生徒側から地域課題に切り込んでいく。

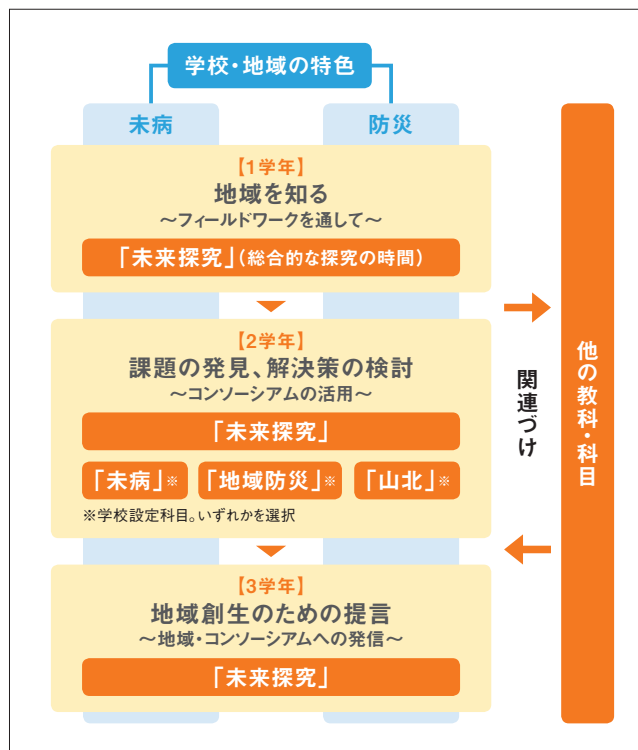
「地域から与えられたことに取り組みだけでなく、生徒が地域の課題を見つけ、解決策を提案していくことを目指します。そのなかで自分の軸をもって考え、行動しようとする志を育んでいきたいと考えています」(藤田校長)

学校・生徒の強みを活かして  
リアルな社会から学ぶ

地域協働による探究プログラムは、SDGsをベースに「未病」と「防災」の2つの切り口で組み立てている。プログラム設計のリーダーである野秋貴浩先生は、その経緯をこう語る。

「『スポーツの山北』ならではの切り口で、SDGsにつながる取組を模索するなかで、まず県が県西地域活性化の一つとして取り組んでいる未病改善プロ

地域連携によるカリキュラムの概要



ジェクトに着目しました。スポーツに関連して健康や身体づくりに重点を置いてきた本校の強みや、生徒の興味・関心を活かし、住民の健康支援につなげてはどうかと考えたのです。さらに、同校が広域避難所に指定されていることから、「防災」も生徒の身近にある地域

との接点と捉え、もう一つの切り口として設定しました」  
3年間の大まかな流れは、まず1学年で「地域を知る」に重点を置いた活動を行い、2学年では学校設定科目で「未病」「地域防災」「山北」のいずれかを選んでそれぞれについて学びながら、

取材・文／藤崎雅子

学校データ

1942年開校／普通科／生徒数630人(男子373人・女子257人)／進路状況(2019年3月卒業)大学66人・短大19人・専門学校等47人・就職62人・その他13人



### 地域社会と協力し、生徒を育てる体制 /



地域を知るためのフィールドワークは、町の協議会の協力により、林業体験や商店街巡回、史跡めぐりなどを行った。



未病グループワーク発表会では、子ども向け紙芝居や、地元特産の足柄茶などを活用して健康意識を高めるアイデアが提案された。

地域の課題に関する個人テーマを設定して探究活動を実施。そして、3学年では行政に向けて地域の課題解決策を提言するというものだ。

このプログラムのポイントは、学校外のさまざまな機関との協働で展開される点にある。同校は今年度、山北町、地元企業や団体、近隣大学などと呼び

かけ、同校が目指す生徒を育成するためのコンソーシアムを構成。カリキュラム開発やフィールドワークの実施、評価設計など多岐にわたって支援や助言を得ながら実施している。

例えば今年度の1学年「未来探究」では、まず地域の商店街や山林などを訪れるフィールドワークを実施し、地元企業を講師として食の問題について講演会を開いた。そのうえで未病に関するグループワークに取り組み、その成果発表会は企業の協賛で開催。審査員として山北町長や企業の方などを招き、生徒は多様な視点から助言をもらった。来年度の2学年のプログラムでも、地域の協力の下でフィールドワークを充実させる計画だ。

「今はスマホであらゆる情報の一般論が入りやすくなりますが、そのことがむしろ視野を狭くしているように感じます。リアルな社会での見聞や経験を重ねることで、相手の立場に立つて想像する力を育てていくことが大切ではないでしょうか」(藤田校長)

「教員の手を離れて地域に出てさまざまな活動を行うなかで、失敗しながら学び、それを積み重ねて大人になってくれたらと願っています」(野秋先生)

しかしながら、さまざまな団体・企業と、生徒の育成という目的を共有し、足並みを揃えて取り組んでいくことは簡単ではない。

「学校側も、行政や企業も、担当者がやらされ感ではなく面白さを感じながら

らやるのが大事。そのために、トップダウンで進めるのではなく、ミドル同士で検討、決定ができるようにしていきます」(藤田校長)

**機会を与えれば自分たちで工夫し始める**

探究活動で身に付ける力を生徒一人ひとりが意識しながら取り組めるよう、単元ごとに、新学習指導要領が示す資質・能力の3つの柱を盛り込んだルーブリックを作成し、自己評価および他者評価を行っている。今年度プログラムに取り組み始めたばかりの1年生は、評価項目のなかでも「伝達力・発信力」の自己評価が低い傾向にあるが、未病のグループワーク発表会では、生徒の堂々とした姿が見られた。

「こちらから教えなくても、生徒は動画やアニメーションを作って表現するなど工夫して発表していました。機会があれば自ら考えアイデアを出すことのできる生徒たちなのだ、改めて感じました。校外からのゲストも多数参加するなかでの発表は、生徒たちの自信にもつながったようです」(野秋先生)

動き始めた探究プログラムの手応えから、「子どもたちの成長を感じる場面が増えるにつれ、先生方のやりがいも向上し、取組は加速していこう」と藤田校長。さらに、多様な分野が関係する探究活動に学校全体で取り組んでいくことで、各教科においても社会の課題を意識した授業を促進し、

#### 生徒's EYE

##### フィールドワークから発想し提案したことが自信に

●フィールドワークを行ったことから地域を身近に感じるようになり、未病グループワークでも参考にようになりました。自分の知識や経験を自由に考えていくことは、聞いているだけの授業より楽しいです。

●未病グループワークの発表では、限られた時間内に伝えるのが予想以上に難しかったですが、言葉を選びながら発表まで自分たちで考えてやりきったことで、自信ができました。今後の探究活動では、みんなの意見を取り入れつつ、自分の意見ももてるようになります。



1学年の清枝歩美さん・大浦奈々さん・古谷 樹さん・工藤龍馬さん。